



朝顔の季節

夏を代表する花といえば、朝顔を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。小学生のころに朝顔の栽培を経験されているかと思います。日本各地で朝顔市が開かれる時期になりました。今月は身近な夏の花、朝顔についてまとめてみました。



○朝顔の出身は

朝顔は日本原産の植物ではありません。原産地は中南米原産と言われている、そこから世界に広がったと言われています。日本には中国から 1200 年前の奈良時代（800 年頃）に渡来したとも考えられています。当時の種子は「牽牛子（けんごし）」と呼ばれており、下剤の効果を漢方薬として用いられていました。朝に花を咲かせることから「朝顔」と名づけられたといわれますが、現在の朝顔以外にも朝に花を咲かせるキキョウやムクゲなどの植物全般をまとめて呼んでいた可能性もあります。平安時代となり、1164 年に平清盛によって厳島神社に納められた「平家納経」には、青色の朝顔が描かれています。この頃になると朝顔が他の植物と区別をされたと考えられています。

○朝顔に大きな変化

その後の朝顔ですが、江戸時代（1600 年頃）までは、突然変異で白い花をつけるなどの変化を起こすことはありました。しかしながら、江戸時代（1700 年頃）の備中松山（現在の岡山県高梁市）で、黒白江南花と呼ばれるこれまでの朝顔とは全く異なる絞り咲きの花が出現するという大きな変化が起きます。この突然変異については、現在は朝顔の詳細な DNA ゲノム解析によって明らかにされています。朝顔の DNA 配列の中に「トランスポゾン（動く遺伝子）」が入り込んだり、抜け出たりした痕跡が残されています。このトランスポゾンにより朝顔の成長を制御する遺伝子が様々な制御を受けることで、花や葉の形や色も変化します。花の形を作る「おしべ」や「めしべ」にも変化が起き、形や機能も変わることで朝顔と思えないような形にまで変化を起こします。種を作ることもできない朝顔ができてしまいます。トランスポゾンは朝顔だけにある性質ではありません。ショウジョウバエの突然変異などもトランスポゾンによるものです。

○朝顔の栽培ブーム

絞り咲きの朝顔の栽培が関西に伝わり、その後江戸に伝わると当時の植木職や庶民の目にとまり江戸時代には 2 回の朝顔を栽培するブームが起きました。

江戸時代 1 回目の栽培ブームは文化文政期（1804～1830 年）です。1806 年に起きた文化の大火で焼けた下谷一体の空き地で朝顔の栽培が行われ、江戸の人の観察眼により様々な品種が作りだされました。その後、江戸時代 2 回目となる栽培ブームが嘉永安政期（1848～1860 年）に起こります。この時期には更に珍奇なものが好まれようになり、花を付けて種を採ることもできない異形の品種も好まれるようになりました。もとの親木の種を残しながら、種のない品種を残すなど様々な

工夫をして珍奇な品種を栽培する試みも行われました。当時はもちろん現在のメンデルの法則などは江戸の一般人は知りませんが、種のできない珍奇な朝顔を栽培して自慢し合いながら楽しむことなどが盛んに行われていました。

明治時代になると伝統的な日本を否定する風潮から、朝顔の栽培も廃れる時期を迎えましたが、明治中期から昭和の初期に 3 回目と言われるような栽培ブームとなり、散逸していた江戸時代に確立した品種を収集することも行われました。

戦争を経て、1948 年（昭和 23 年）には、入谷周辺で朝顔市が七夕の時期に開催されることになりました。これを切っ掛けに全国で朝顔市が開かれるようになりました。



【参考にした情報】

- 1) 特別展「伝統の朝顔」；国立歴史民俗博物館

<https://www.rekihaku.ac.jp/exhibitions/plant/project/index.html>

- 2) アサガオの園芸史；九州大学

<http://mg.biology.kyushu-u.ac.jp/hort-history.php#:~:text=%E4%B8%AD%E5%8D%97%E7%B1%B3%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E8%B5%B7%E6%BA%90%E3%81%AE%E3%82%A2%E3%82%B5%E3%82%AC%E3%82%AA,%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%9F%E3%82%88%E3%81%86%E3%81%A7%E3%81%82%E3%82%8B%E3%80%82>

- 3) 入谷朝顔市：下谷観光連盟・入谷朝顔実行委員会

<https://www.asagao-maturi.com/>